

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



4

よろこびの知らせ
第4集

目 次

リバイバルの恵み	1
歴代誌第二 34:29-33	
新しい契約	10
エレミヤ 31:1-6	
預言者の疑問	19
ハバクク 1:12-17	
反逆の民	28
歴代誌第二 36:11-21	

ここに収められたのは、2019年10～11月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖書箇所は“Gospel Project”に沿って選ばれており、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

リバイバルの恵み

歴代誌第二 34:29-33

34:29 すると、王は使者を遣わして、ユダとエルサレムの長老をひとり残らず集めた。

34:30 王は主の宮へ上って行った。ユダのすべての人、エルサレムの住民、祭司とレビ人、および、上の者も下の者も、すべての民が行った。そこで彼は主の宮で発見された契約の書のことばをみな、彼らに読み聞かせた。

34:31 それから、王はその定め場所に立ち、主の前に契約を結び、主に従って歩み、心を尽くし、精神を尽くして、主の命令と、あかしと、おきてを守り、この書物にしるされている契約のことばを行なうことを誓った。

34:32 彼はエルサレムとベニヤミンにいるすべての者を堅く立たせた。エルサレムの住民は、その父祖の神である神の契約に従って行動した。

34:33 ヨシヤはイスラエル人の全地から、忌みきらうべきものを除き去り、イスラエルにいるすべての者を、その神、主に仕えさせた。彼の生きている間、彼らはその父祖の神、主に従う道からはずれなかった。

一、ルターの宗教改革

10月31日は「ハロウィーン」ですが「宗教改革記念日」でもあります。1517年の10月31日に、アウグスティヌス会修道士でウィッテンベルグ大学教授マルティン・ルターが「九十五箇条の提題」を教会の扉に掲げました。これは、当時、ドイツで販売されていた「贖宥状」に関しての学問的な議論を呼びかけたものでしたが、ものごとはルターが思ってもみなかった方向に進み、結果として、ドイツにローマ・カトリック教会から分かれた新しい教会が生まれました。一般に「プロテスタント教会」と言われる教会です。

しかし、「プロテスタント」という名前は後につけられたもので、ルター自身は新しい教会を「福音教会」と呼びました。聖書に示されている福音を明確に教える教会という意味です。では、ルターの宗教改革まで教会に福音は無かったのでしょうか。そんなことはありません。教会はいつの時代も福音を保ってきました。しかし、教会の組織や制度が複雑になり、神学が聖書から離れて独り歩きし、本来真理を目に見える形で表す儀式が、それを守れば救われるものと考えられ、逆に真理を隠すものになってしまっていたのです。ルターが目指したのは教会で福音がまっすぐに、また単純に語られ、教えられること、誰もが自分たちに分かる言葉で福音を聞き、信じて救われ、そして福音にふさわしい生活をするることでした。ルターはそのために聖書をドイツ語に訳し、「教理問答」を書き、説教者を養成しました。本当の「プロテスタント」とは、たんに古いものに「プロテスト」して、新しいものを取り入れるのではなく、本当に古いもの、つまり聖書に立ち返り、本当に新しいもの、聖霊のみわざを追い求めていくことなのです。

二、ヨシヤの宗教改革

「宗教改革」といえば、今ではルターの宗教改革を指すようになりましたが、ヨシヤ王が行ったことも「ヨシヤの宗教改革」と呼ばれています。「ヨシヤの宗教改革」を話すのに、彼の祖父、マナセ王のことから話す必要があります。

マナセは「バアルのために祭壇を立て、アシェラ像を造り、天の万象を拝み、これに仕え」（歴代誌第二

33:3) ました。神殿の庭に天の万象のために祭壇を築き（同 33:5）、神々の偶像を神殿の中に持ち込み、そこに安置しました（同 33:7）。「自分の子どもたちに火の中をくぐらせ、うらないをし、まじないをし、呪術を行ない、霊媒や口寄せ」（同 33:6）など、主が禁じておられるすべてのことを行いました。聖書は彼についてこう言っています。「マナセはユダとエルサレムの住民を迷わせて、主がイスラエル人の前で根絶やしにされた異邦人よりも、さらに悪いことを行なわせた。主はマナセとその民に語られたが、彼らは聞こうともしなかった。」（同 33:9-10）

本当ならマナセのような王は即座に滅ぼされてよかったのに、「主はマナセとその民に語られた」というのです。あわれみ深い主は、たとえご自分に背く者であっても、その人を惜しんで、できれば滅ぼしたくないと考え、まことの神に立ち返れと呼びかけ、悔い改めの機会を与えてくださったのです。主は、私たちを突然、罰しはしません。優しく諭し、それでも聞かなければ警告をお与えになります。

私たちの身体はじつに巧みに造られています。身体のどこかが悪くなると、それを知らせるために痛みが生じます。痛みが小さいうちに、手当をすれば、大きな病気を防ぐことができるのです。もし、人の身体がなんの痛みも感じなかったり、痛み止めを使って痛みを感じないようにしていたら、あるいは、麻薬を使って痛みのシグナルを無視していたら、私たちは健康を保つことができず、突然死んでしまうかもしれないのです。

これは身体ばかりでなく、霊的なことでも同じです。C.

S. ルイスは「苦しみや痛みは神の警告のメガフォンである」と言いました。人が罪を犯して良心に痛みを覚え、悪を行ってその結果を身に受けるのは、人がそれ以上の罪を犯さないためです。痛みは、罪と悪を悔い改めるようにとの、神からの「イエロー・カード」です。もし、私たちが、そうした痛みをごまかしながら生きているなら、「レッド・カード」を突きつけられてもしかたがないのです。

マナセ王は、主から「レッド・カード」を受け、バビロンに引かれていきました。今まで悪のかぎりを尽くしてきたマナセでしたが、こうなってはじめて目が覚めました。バビロンの地で、へりくだり、悔い改め、主に叫び求めました。「もう遅い。今さら助けてくださいなどと祈るのはあつかましい。」だれもがそう思うでしょう。しかし、主は人の思いを超えたことをなさいました。人の悪は底知れないほど深いのですが、主のあわれみはそれにまさって深く、なんと主は、このマナセを赦し、もういちどエルサレムに戻されたのです。それからのマナセは以前のマナセではありませんでした。偶像と祭壇を取り除き、人々が主に仕えるように導こうとしました。

マナセの死後、アモンが王位を継ぎましたが、わずか2年で死に、アモンの子ヨシヤが王になりました。ヨシヤはそのときわずか8歳でしたが祖父の志を継ぎました。

ヨシヤはその治世の18年目、26歳のときに神殿の修理を始めました。そのとき「律法の書」が発見されたのです。それは、神殿の契約の箱の側に置かれるべきもので（申命記 31:26）、イスラエルの指導者たちはその写しを

いつも手元に置いて守らなければならないものでした。ヨシュア記 1:8 にこう書かれている通りです。「この律法の書を、あなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならない。そのうちにしるされているすべてのことを守り行なうためである。そうすれば、あなたのすることで繁栄し、また栄えることができるからである。」さらに、律法の書は一般の人々にも読み聞かせられなければならないものでした（申命記 31:10-12）。ところが、その律法の書が長い間行方不明となっていたのです。王も民衆もそれを読んだことがありませんでした。ヨシヤは、発見された律法の書を読んだ時、それが神が言葉であることを悟り、御言葉の前に自らを低くしました。そして人々を集め、律法の書を読み聞かせました。

この律法の書は、おそらく申命記のことだろうと思われます。「申命記」の「申」という字には「再び」という意味がありますから、「申命」というのは「再契約」ということになります。申命記は、神と神の民との再契約のことが書かれています。エジプトから救われたイスラエルの人々は「主を自分たちの神とし、自分たちは主の民となる」という契約を主と結びましたが、その世代の人々は荒野の四十年の間に皆死に絶えてしまいました。それでモーセは、その子どもたち、次世代の人々にもう一度、主との契約を結ばせました（申命記 29:1）。このことは、主との契約が世代から世代へと受け継がれていくものであることを教えています。神との契約は、遠い昔に先祖が立てたから、自分が改めて契約を結び直す必要はないというわけではありません。神の民は、くりかえし契約の言葉を聞き、それを聞くたびに、自分と主

との間の契約を更新していく必要があるのです。

ヨシヤ王は、主を自分たちの神とし、自分たちは神の民となるという契約を人々に、もう一度立てさせました。神との契約の更新が、ヨシヤの宗教改革の中心でした。

三、神の言葉とリバイバル

ユダの国が位置しているところは、北は新しく興ったバビロン、南は古くからの大国エジプトが衝突した場所でした。ユダのような小さな国が、そんな場所で、紀元前930年から568年まで何百年も保たれてきたのは、まさに歴史の七不思議のひとつ、奇蹟だと言ってよいでしょう。それを可能にしたのは、主のあわれみであり、人々の信仰でした。

ヨシヤ王の後に4人の王が続きましたが、誰もヨシヤの宗教改革を引き継ぎませんでした。ユダの国は信仰を失ったため、最後にはバビロンに滅ぼされましたが、ヨシヤの宗教改革は無駄ではありませんでした。エルサレムが滅ぼされ、エルサレムの主だった人たちはバビロンに連れて行かれましたが、ヨシヤの時代に再発見された律法の書もバビロンに運ばれ、他の聖書と共に読まれ、編纂され、それを研究する学者も起こりました。やがてユダヤの人々がエルサレムに戻ることを許されたとき、「律法の書」も再びエルサレムに帰ってきました。申命記31:10-12にこうあります。「仮庵の祭りに、イスラエルのすべての人々が、主の選ぶ場所で、あなたの神、主の御顔を拝するために来るとき、あなたは、イスラエルのすべての人々の前で、このみおしえを読んで聞かせな

ければならない。民を、男も、女も、子どもも、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も、集めなさい。彼らがこれを聞いて学び、あなたがたの神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばを守り行なうためである。」この言葉のとおり、祭司であり学者であったエズラは、エルサレムの広場で夜明けから真昼まで律法の書を朗読し、説明しました。ネヘミヤ 8:8 に「彼らが神の律法の書をはっきりと読んで説明したので、民は読まれたことを理解した」とあります。人々はそれを理解したとき、泣きました。自分たちの罪を示され、悔い改めたからです。悔い改めは尊いことですが、嘆き悲しみ続けることは主のみこころではありませんでした。それでネヘミヤは、「主を喜ぶことは、あなたがたの力である」（ネヘミヤ 8:10 新改訳 2017）と言って、人々に主を喜ぶことを教えました。ネヘミヤ 8:12 には「こうして、民はみな、…大いに喜んだ。これは、彼らが教えられたことを理解したからである」と書かれています。神の言葉がはっきりと語られ、人々がそれを理解したとき、悔い改めが起こり、続いて、喜びが起こりました。人々の信仰がよみがえったのです。

私たちはこうした信仰の復興を「リバイバル」と呼んでいます。神は、人々の信仰が冷え切って神から離れ、滅びていかないように、人々の心の中にある小さな信仰の火種を再び大きく燃やしてくださいます。そういう意味では「宗教改革」も「リバイバル」も同じものです。そして、宗教改革においても、リバイバルにおいても、いちばん大切なのは神の言葉です。神の言葉はリバイバルの燃料であると言われています。

ルターの宗教改革は九十五箇条の提題を掲げたときや、ウォルムスの国会で「我ここに立つ」と言った時に始まったものではありません。それ以前、1513年から1517年にかけてルターは最初に詩篇、それからローマ人への手紙とガラテヤ人への手紙を大学で講義しています。ルターは講義のために聖書を学び直していた時、福音を再発見し、それが福音を教える新しい教会を生み出したのです。宗教改革やリバイバルはいつの時代も、人々が御言葉に向かう時に起こり、御言葉に聞き従うたましいの中から始まるのです。

200年ほど前までは、聖書に限らず、書物は誰もが手にすることができるものではありませんでした。ルターの時代以降、さまざまな国の言葉に聖書が翻訳され、出版されるようになって、それを買って読むことができたのはほんの一部の人たちでした。人々は礼拝で朗読される聖書の言葉を暗記して信仰を保ってきました。しかし、今、聖書はどこでも手に入ります。けれども、神の言葉が、ヨシヤ王の時代やエズラの時代のように、またルターの時代のように人々のたましいの中に入っているかというところとは言えません。現代ほど、様々な主義主張がやかましく叫ばれている時代はありません。その騒がしい声のため、私たちの耳は神の静かな声を聞くことができなくなっています。御言葉が私たちの心の内で燃え、私たちが御言葉に燃やされていくのでなければ、リバイバルは起こらないのです。もう一度、心を静めて、御言葉に聞きましょう。御言葉が輝きを放つ、リバイバルの恵みが与えられるよう祈り求めましょう。

(祈り)

あわれみ深い父なる神さま。あなたはあなたに背いた者を立ち返らせ、遠く離れた者を引き寄せ、冷ややかな心を温め、信仰の炎を燃え上がらせてくださいます。あなたの言葉を私たちの霊のうちに注いでください。御言葉の油を注ぎ、聖霊の息吹で私たちの信仰を燃え立たせ、この地にリバイバルを与えてください。そして、イエス・キリストの福音を世界に広めさせてください。私たちの主イエス・キリストによって祈ります。

新しい契約 エレミヤ 31:1-6

31:1 「その時、——主の御告げ。——わたしはイスラエルのすべての部族の神となり、彼らはわたしの民となる。」

31:2 主はこう仰せられる。「剣を免れて生き残った民は荒野で恵みを得た。イスラエルよ。出て行って休みを得よ。」

31:3 主は遠くから、私に現われた。「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。

31:4 おとめイスラエルよ。わたしは再びあなたを建て直し、あなたは建て直される。再びあなたはタンバリンで身を飾り、喜び笑う者たちの踊りの輪に出て行こう。

31:5 再びあなたはサマリヤの山々にぶどう畑を作り、植える者たちは植えて、その実を食べることができる。

31:6 エフライムの山では見張る者たちが、『さあ、シオンに上って、私たちの神、主のもとに行こう。』と呼ばわる日が来るからだ。』

一、真実の預言

ヨシヤ王がエジプト王との戦いで戦死してから、ユダの国はエジプトの支配のもとに置かれました。ヨシヤ王に代わってエホアハズが王になりましたが、エジプトはエホアハズを廃してエジプトに連れ去り、エホアハズの兄弟エルヤキムを代わりに王とし、エルヤキムの名をエホヤキムと改めさせました。エジプトがユダの王の名前を変えさせたというのは、エホヤキムが名前だけの王であり、実際はエジプトがユダを支配するようになったことを意味します。

このころ、バビロンのネブカドネザルはエジプトにまで勢力を伸ばそうとしていて、ユダに攻め込み、エホヤ

キムをバビロンに連れて行きました。それで、エホヤキムの子エホヤキンが王となりましたが、翌年、ネブカドネザルが再びやってきて、エホヤキンをもバビロンに連れて行き、エホヤキンの叔父マタヌヤをゼデキアと改名させ、王としました。エジプトがエルヤキムをエホヤキムと改名させたのと、同じことをしたのです。

ユダの末期の王の名前はどれも似ていて分かりにくいですが、ヨシヤ王の後の二人の王、エホアハズ、エホヤキムはエジプトに、その後のふたり、エホヤキンとゼデキアはバビロンの言うがままにされていたのです。

エレミヤは、ヨシア王、エホヤキム王、そしてゼデキア王の時代に神の言葉を語った預言者でした。ヨシア王までは、まことの神、主に対する信仰がありましたが、その後の王たちは、神の言葉に耳を傾けるような人たちではありませんでした。国が存亡の危機にあるのだから主に頼るべきであるのに、それとは逆のことをしていたのです。王をとりまく指導者たちも墮落していました。彼らは、バビロンの力をその目で見て、知っていながらエジプトと手を組めばバビロンの支配から逃れられるという気休めを語っていました。しかしエレミヤは、「バビロンはかならず攻めて来る。エルサレムの人々は捕虜となってバビロンに引かれていく。人々が最後の頼みとしている神殿さえも滅ぼされてしまう。だから今はバビロンに従ったほうがよい」と勧めました。

それでエレミヤは「非国民」、「売国奴」などと言われ、非難されました。また、彼らは神殿に偶像を置くな

どして自ら神殿を汚していたにもかかわらず、主はご自分の神殿を敵の手に渡すことはない。だからエルサレムに神殿があるかぎり、バビロンは攻めて来ないとも言っていました。それでエレミヤは「彼らは、わたしの民の傷を手軽にいやし、平安がないのに、『平安だ、平安だ。』と言っている」（エレミヤ 6:14）「あなたがたは、『これは主の宮、主の宮、主の宮だ。』と言っている偽りのことばを信頼してはならない」（同 7:4）と言って、人々に真実の言葉に耳を傾けるように言いました。そのためエレミヤは投獄されたり（同 32:2）、泥の穴の中に投げ込まれたりしました（同 38:6）。主からの言葉を語らず、指導者や民衆に媚びて、聞こえの良いことだけを口にする預言者もありましたが、エレミヤは、決して神の言葉を曲げず、真実だけを語り続けました。人は、真実な神の言葉によってだけ生かされ、国は、真実と正義を基盤にしてはじめて立つことができるからです。聖書は、終わりの時代には「主のことばを聞くことのききん」（アモス 8:11）が来ると言っています。いつの時代も、私たちは、真実な主の言葉を求めていきたいと思えます。

二、愛の預言

エレミヤは「涙の預言者」として知られています。それは、エレミヤ書に次のような言葉があるからです。

「ああ、私の頭が水であったなら、私の目が涙の泉であったなら、私は昼も夜も、私の娘、私の民の殺された者のために泣こうものを。」（エレミヤ 9:1）「もし、あ

あなたがたがこれに聞かなければ、私は隠れた所で、あなたがたの高ぶりのために泣き、涙にくれ、私の目は涙を流そう。主の群れが、とりこになるからだ。」（同 13:17）「あなたは彼らに、このことばを言え。『私の目は夜も昼も涙を流して、やむことがない。私の民の娘、おとめの打たれた傷は大きく、いやしがたい、ひどい打ち傷。』」（同 14:17）こうした言葉は、主がユダの民のために泣くほどに悲しんでおられると言っているのですが、この言葉を伝えたエレミヤ自身もまた人々のために涙を流したに違いありません。

エレミヤの涙は、主の言葉を語っても人々がそれを聞いてくれないことに対する「悔し涙」ではありませんでした。真実を語ったために苦しめられるという理不尽に対する嘆きの涙でもありませんでした。エレミヤの涙は主が人々を愛して流されたのと同じ愛の涙でした。

皆さんの子どもが、悪い人々に騙され、その仲間になり、犯罪の片棒をかつがされたりしたとしたら、皆さんの心にどんな感情が起こるのでしょうか。「なんと馬鹿なことをしたのだ」という怒りの感情でしょうか。「ああもっと厳しく育てておけばよかった」という後悔の念でしょうか。それとも、「これでこの子の人生もおしまいだ」という絶望の気持ちでしょうか。おそらく、そのどれでもないでしょう。子どもを愛する親なら、自分の子をあわれむ悲しみの感情が、真っ先に起こってくるだろうと思います。そして、それは、自分の子どもをなんとかして立ち直らせてやりたいという積極的な思いに変え

られていくことでしょう。エレミヤ書に書かれている主の悲しみは、子を愛するように神の民を愛された、父なる神の愛を示しています。

父なる神とともに、御子イエスも、その民のために涙を流されました。イエスが弟子たちに「人々は人の子をだれだと言っていますか」と聞いたとき、弟子たちは「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています」と答えました（マタイ 16:14）。イエスを「エレミヤ」だと言った人々は、イエスがしばしば、人々のために涙されたことを見て、「涙の預言者」エレミヤと結びつけたのだと思われます。ヨハネ 11:35 は「イエスは涙を流された」と言っています。これは英語では “Jesus wept.” で、ふたつの単語しかない聖書で一番短い節です。聖書を章と節に区分した人が、この言葉を独立した節にしたのは、この短い言葉の中にイエスの愛が凝縮されていることを見抜いたからだと思います。

父なる神、子なる神とともに、聖霊なる神も悲しまれます。エペソ 4:30 に「神の聖霊を悲しませてはいけません」とある通りです。たとえうわべだけは信仰者らしくふるまっても、内面にそれとは逆の思いを持っているなら、私たちのうちに住まわれる聖霊は、それをご覧になって、悲しまれるのです。しかし、聖霊の悲しみもまた、私たちのための悲しみ、私たちを愛するゆえの悲しみです。私たちが聖霊と共に自分の罪を悲しみ、悔い

改めるなら、私たちはその罪からきよめられ、再び喜びと祝福を取り戻すことができるのです。悲しみの涙の背後にある主なる神の深い愛は、預言者エレミヤ以来、今にいたるまで、私たちに告げ知らされています。

三、希望の預言

エレミヤ 31:16 で、主はこう言われました。「あなたの泣く声をとどめ、目の涙をとどめよ。あなたの労苦には報いがあるからだ。——主の御告げ。——彼らは敵の国から帰って来る。」ユダの人々のために涙を流して下さった神が人々には、「泣くな」と言っておられるのです。エルサレムがバビロンに滅ぼされ、人々はバビロンに連れて行かれます。しかし、その刑罰は永遠ではありません。きよく、正しい神は、罪を犯した人々を裁かなければなりません。その刑罰が終わったとき、神の民を回復させてくださるのです。主は「彼らは敵の国から帰って来る」と言われました。涙が喜びに変わる日が来ると言われました。主はエレミヤを通して最初に「真実な預言」を、次に「愛の預言」をお与えになりましたがここでは「希望の預言」を与えておられるのです。

エレミヤ 29:11 にこうあります。「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」主は、偽りの預言者たちが「平安だ、平安だ」と言って安心しきっているとき、エレミヤを通して「わざわい」が来ると警告されました。しかし、人々が

「わざわいだ、わざわいだ」と言って絶望しているとき「平安」を宣言し、人々に希望をお与えになりました。人の目には、わざわいしか見えない時でも、主は私たちのために将来の平安を準備しておられるのです。私たちも、たとえ、苦しみしか見えない時でも、主のご計画に従って生きるなら、私たちは、必ず、希望ある将来へと導かれるのです。

主は、この希望を確かな契約として人々に与えてくださいます。バビロンに捕らえられた民が帰って来る時、神は、もういちど、彼らの神となり、彼らが神の民となると、エレミヤ31章は告げています。つまり、神と神の民との契約が更新されるというのですが、それは、エレミヤ31:31に「見よ。その日が来る。——主の御告げ。——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ」とある通り、「新しい契約」と呼ばれるほどのもので、今までのものとは違っていると言われています。その契約の内容は、主が人々の神となり、人々がその民となるというもので、それは、以前の契約と変わるものではありません。契約の当事者である主は変わることはありません。変わるのは人間のほうです。実際、神の民は契約に背く者へと変わってしまいましたしかし、主は、そうした神の民を造り変えて、神の契約を心に刻み、そこから離れない者にすると言われましたバビロンから帰って来る人々との契約が「新しい契約」と言われるのは、そのためです。実際、それまで偶像礼拝をしていたイスラエルの人々は、バビロンから帰って

きた時には偶像から離れ、二度と偶像礼拝をしませんでした。

けれども、新しい契約が完全な形で成就したのは、イエス・キリストによってです。イエス・キリストが全人類の罪の赦しのために十字架でご自分を捧げられたことによって、私たちに完全な赦しを与えられました。キリストの復活と昇天ののち、聖霊が信じる者のうちに住み信じる者を内側からきよめてくださいました。エレミヤ 31:33-34 に「わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのようにして、人々はもはや、『主を知れ。』と言って、おのおの互いに教えないそれは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。——主の御告げ。——わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ」とあることが、イエス・キリストによって、聖霊を通して今の「新約」の時代に成就したのです。

この新しい契約は、主の愛から生まれたものです。主は言われます。「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。」（エレミヤ 33:3）主は、永遠の愛で私たちを愛し続け、決して裏切らないと約束し、それを変わらない契約とされました。主は真実と愛をもって私たちに語り続けておられます。「わたしはあなたの神、あなたはわたしの民」と。私たちも主に答えましょう。「あなたは私の神、私はあなたの民です」と。

(祈り)

永遠の愛で、私たちを愛してくださる真実な神さま。今朝も、あなたの真実と、愛と、希望の言葉を聞かせてくださり感謝します。あなたの預言は、イスラエルの歴史の中で証しされ、イエス・キリストによって成就し、聖霊によってより確かなものになりました。私たちを真実と愛と希望をもたらす新しい契約に生きる者としてください。キリストの恵みにより、聖霊の力によって、そのことを成し遂げてください。主イエスのお名前で祈ります。

預言者の疑問 ハバクク 1:12-17

1:12 主よ。あなたは昔から、私の神、私の聖なる方ではありませんか。私たちは死ぬことはありません。主よ。あなたはさばきのために、彼を立て、岩よ、あなたは叱責のために、彼を据えられました。

1:13 あなたの目はあまりきよくて、悪を見ず、労苦に目を留めることができないのでしょうか。なぜ、裏切り者をながめておられるのですか。悪者が自分より正しい者をのみこむとき、なぜ黙っておられるのですか。

1:14 あなたは人を海の魚のように、治める者のないほう虫のようにされます。

1:15 彼は、このすべての者を釣り針で釣り上げ、これを網で引きずり上げ、引き網で集める。こうして、彼は喜び楽しむ。

1:16 それゆえ、彼はその網にいけにえをささげ、その引き網に香をたく。これらによって、彼の分け前が豊かになり、その食物も豊富になるからだ。

1:17 それゆえ、彼はいつもその網を使い続け、容赦なく、諸国の民を殺すのだろうか。」

一、信仰と疑問

ある人からこんなメールを受け取りました。「今の教会は、疑問を持つことを許されないような、雰囲気があります。答えは常に与えられていて、それに合わせなければ、よき教会員にあらず、のような無言の空気です。」短い文面ですが、私はこの人のことをよく知っているので、何を言いたいかはすぐに分かりました。この人は、人生のあらゆる問題の解決が神にあり、聖書にその答えがあることをかたく信じている人です。しかし、

神に信頼し、神の言葉に従って生きるという生き方には、すべての人に共通したものと共に、その人と神との関係の中で試行錯誤しながら選び取っていかなければならないものがあります。ですから、神の言葉に応答する時、「私の場合はどうしたらいいだろうか」と思い悩むこともあるのです。そんな思いを打ち明けても、「考えたり、悩んだり、疑問を持ったりしないで、みんなが考えるように考え、みんながするようにすればいいのだ」などと言われたら、深い失望を感じてしまうことでしょう。もし教会にそんな雰囲気があれば、一つの方向だけに進んでいくカルト的なものになってしまう危険があります。

信仰とは、知性も理性も無視して頭から信じ込むことではありません。聖書は「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」（マルコ 12:30）と教えています。また、「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません」（ヨハネ 4:24）とも教えています。「霊とまこと」の「まこと」は他のところで「真理」と訳されています。「真理」は知性や理性と結びついたものですから、「真理」によって礼拝するという場合、それは知性を用いて礼拝するということになります。ですから、コリント第一 14:15には、「ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう」と言われているのです。霊と知性は決して矛盾するものではなく、霊は知性を明らかに

し、知性は霊を導くのです。

神を信じ、従うことに知性がかかわっていますが、人間の知性には限りがありますから、私たちが「なぜなのですか」「どうしてそうなのですか」という疑問を持つのは、当然のことなのです。詩篇には「なぜ」という言葉が繰り返され、しつこく問い詰めている箇所が数多くあります。また、「いつまで」という言葉も頻繁に使われています。たとえば詩篇 74:1 には「神よ。なぜ、いつまでも拒み、御怒りをあなたの牧場の羊に燃やされるのですか」とあって、「なぜ」と「いつまで」が両方使われています。では、「なぜ」、「いつまで」と祈った、詩篇の作者は不信仰な人たちなののでしょうか。いいえ、彼らは神を信じ、神の民のために真剣に、熱心に救いを求める人たちでした。真剣で、熱心であったからこそ、なぜ神の民が苦しみ続けなければならないのか、正しい者を苦しめる者が懲らしめられないでいるのかということ問い続けたのです。

信仰を持つ者は「疑問」を持つてはいけないと言われることがあります。それは正しくはありません。「信仰」の反対は「疑い」であって「疑問」ではないからです。信仰者は神を信じるからこそ、神が、なぜ、このように言われ、このようなことをされるのかを知ろうとして「疑問」を持つのです。

二、疑いと疑問

ルカの福音書 1 章に「疑い」と「疑問」の違いを示す出来事が記されています。それは、ザカリヤとマリアのことです。ふたりに御使いが現われ、それぞれにヨハネの

誕生とイエスの誕生が告げられました。ザカリヤとエリサベツ夫妻は子どもがなく、ふたりともすでに高齢になっていました。天使はザカリヤに「こわがることはない。ザカリヤ。あなたの願いが聞かれたのです。あなたの妻エリサベツは男の子を産みます。名をヨハネとつけなさい」（ルカ 1:13）といううれしい知らせを告げましたが、ザカリヤはそれに対して「私は何によってそれを知ることができましようか。私ももう年寄りですし、妻も年をとっております」（同 1:18）と答えました。これは、「私たちは子どもを持つことを何年も前にあきらめている。そんなことはありえない」という気持ちから出たものでした。ザカリヤは神の言葉も、神の力も、信じなかったのです。御使いがザカリヤに「見なさい。これらのことが起こる日までは、あなたは、…ものが言えなくなります。私のことばを信じなかったからです」（同 1:20）と言った通りです。

御使いはマリアにも現われて、こう言いました。「こわがることはない。マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。」（ルカ 1:30）これに対してマリアは「どうしてそのようなことになりえましよう。私はまだ男の人を知りませんのに」（同 1:34）と答えました。マリアは「どうして」と言いましたが、それは、ザカリヤが口にしたような疑いの言葉ではありませんでした。「未婚の自分がどうやって子どもを産むのだろう。神は、私に何をしようとしておられるのだろう」という素直な「問い」でした。その答を聞いた

時、マリアは「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように」（同 1:38）と言って、神の言葉を受け入れています。エリサベツがマリアに「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょうか」（同 1:45）と言ったように、マリアは模範的な信仰者でした。マリアが「どうして」と問うたからといって、マリアが不信仰であったと誰が言えるでしょう。

信仰と疑問は矛盾しません。矛盾しないどころか、神のみこころを問う疑問は信仰を成長させるのです。マリアは「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人」でした。しかし、同時に、主が語られたことの意味を問い詰める人でした。マリアはイエスを出産した日、羊飼いたちが話した不思議な出来事を黙って聞き、それらを「すべて心に納めて、思いを巡らして」（ルカ 2:19）いました。

ルカ 2:41-52 にはイエスが 12 歳の時、両親と共にエルサレムに行った時のことが書かれています。神殿での礼拝を終えてナザレに向かって一日の道のりを行ったところで、ヨセフとマリアはイエスがいなことに気付きました。ふたりがエルサレムに引き返すとイエスは神殿で学者たちの話を聞いたり、質問したりしていました。そのときイエスはヨセフとマリアに言いました。「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」（ルカ 2:49）ふたりは、なぜイエスが、自分たちを困らせるようなことし、こんなことを言ったのか分かりませんで

した。しかし、「母はこれらのことをみな、心に留めておいた」（同 2:51）のです。マリアはイエスの言葉を心に納め、その意味を問い続けました。そして、イエスが我が子でありながら、同時に、神の御子であることを悟りました。マリアはイエスの母となっただけでなく、イエスを神の子と信じ、イエスを主として従う信仰者になったのです。

聖書は私たちに命じています。「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。」（ペテロ第二 3:18）私たちは神のみこころやみわざのすべてを知り尽くすことはできませんが、イエス・キリストを知ることににおいては、そのリミットを広げていくことができるのです。神の言葉を心に蓄え、神の言葉に問い、神の言葉から答を聞くことによって、主を知る知識は成長していきます。「疑問」は信仰の敵ではありません。信仰の敵は、問うことすらしない無気力なのです。

三、預言者と疑問

さて、今日の箇所は、預言者ハバククの言葉です。預言者ハバククは南王国ユダの預言者でした。バビロンにネブカドネザルという強力な王が起こり、そのころのユダは風前の灯火といった状態でした。そうした危機のときこそ、主に立ち返らなければならないのに、人々はどんどん主から離れていき、社会はますます混乱していききました。ハバククは、「主よ。私が助けを求めて叫んでいますのに、あなたはいつまで、聞いてくださらないのですか。私が『暴虐。』とあなたに叫んでいますのに、

あなたは救ってくださらないのですか」（ハバクク 1:2）
と言って、必死になって神の救いを叫び求め、それを待ち望みました。ハバククも詩篇 74 の作者と同じように、「なぜ、いつまで」と神である主に問い続けたのです。

ハバククを悩ませた疑問は、なぜ主はバビロンを罰しないのかということでした。12 節で「主よ。あなたはさばきのために、彼を立て、岩よ、あなたは叱責のために、彼を据えられました」とありますが、この「彼」はバビロンのネブカデネザルのことです。ハバククは、主がご自分の民を懲らしめるために、バビロンを用いておられることを知っていました。そして、神がこの世の悪を使って、神の民の悪を懲らしめることをある程度受け入れていました。しかし、バビロンが神の民に対してすることはあまりにも残酷でした。それでハバククは「なぜ、裏切り者をながめておられるのですか。悪者が自分より正しい者をのみこむとき、なぜ黙っておられるのですか」と言って、「確かにユダは罪深い。しかし、バビロンはユダよりももっと大きな悪ではないのか。なぜあなたは黙っておられるのか」と、主に向かって祈ったのです。

ハバククは預言者でした。預言者として神の言葉を伝える責任がありました。しかし、神の言葉を得ることができませんでした。彼は、偽りの預言者たちが「平安だ。平安だ」とか「これは主の宮だ。これは主の宮だ。これは主の宮だ」という気休めの言葉を語るようなことはしたくなかったのです。それで、ハバククは、「私は、見張り所に立ち、とりでにしかと立って見張り、主

が私に何を語り、私の訴えに何と答えるかを見よう」
(2:1) と言って、神の言葉が与えられるまで、それを熱心に求めました。

イエス・キリストを信じる者は神の言葉を持っています。「神が人を愛し、イエス・キリストによって、永遠のいのちを与えてくださる」という福音を知っています。ですから、確信をもって「イエス・キリストを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」と言うことができます。しかし、私たちの人生に起こる様々な出来事、とりわけ、悲惨な出来事について、「神が愛なら、なぜこんなことが私に起こったのか」と質問される時、どんな場合でも的確に答えることができるとは限りません。私は、以前、ひとりの青年に会いました。彼の両親は彼の見ている前で強盗に殺されたのです。私は、そういう人に、その出来事についての納得のいく説明などできないと思いました。それは全くの悲劇です。それに答える唯一の方法は、私自身が、その人の立場に立って、「主よ。なぜなのですか」と、主に問い続ける他ないと思いました。通り一遍の答は、たましいの深い疑問に対しては何の役にも立たないばかりか、傷ついている人をさらに苦しめるだけなのです。

ハバククは答を求めて苦闘しました。ユダの国の心ある人々とともに苦しみながら、疑問をぶつけながら、主に迫りました。そして、「もしおそくなっても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない」(2:3)という答を得ました。「それ」とは神の定めの時、審判と救いの日です。神ご自身が来られて、悪を裁き、神の民を

救われるのです。3章はハバククの祈りですが、楽器の伴奏つきで歌われています。ハバククの信仰の疑問は、答えられ、それは賛美となって神にささげられました。思い悩み、疑問を抱えている人に、「そんなに考えないで賛美しなさい」と言うことができないわけではありません。しかし、神への賛美は、やはり、「なぜ」、「いつまで」と問い続け、答を得た後ではじめて生まれるものだと思います。信仰の疑問をごまかさず、そこから逃げ出さないで、神に問い続け、神の言葉を待つ。それが、私たちが救いへと導くのです。

(祈り)

聖なる神さま。あなたは天の聖所におられ、地を治めておられます。地上にある私たちはあなたのみこころとみわざのすべてを知りつくすことはできません。常にあなたに問い続け、あなたからの答を得ることができますよう、導いてください。そして疑問が賛美へと変わる時を待ち望ませてください。主イエスのお名前です。

反逆の民

歴代誌第二 36:11-21

36:11 ゼデキヤは二十一歳で王となり、エルサレムで十一年間、王であった。

36:12 彼はその神、主の目の前に悪を行ない、主のことばを告げた預言者エレミヤの前にへりくだらなかつた。

36:13 彼はまた、ネブカデネザルが、彼に、神にかけて誓わせたにもかかわらず、この王に反逆した。このように、彼はうなじのこわい者となり、心を閉ざして、イスラエルの神、主に立ち返らなかつた。

36:14 そのうえ、祭司長全員と民も、異邦の民の、忌みきらうべきすべてののならわしをまねて、不信に不信を重ね、主がエルサレムで聖別された主の宮を汚した。

36:15 彼らの父祖の神、主は、彼らのもとに、使者たちを遣わし、早くからしきりに使いを遣わされた。それは、ご自分の民と、ご自分の御住まいをあわれまれたからである。

36:16 ところが、彼らは神の使者たちを笑いものにし、そのみことばを侮り、その預言者たちをばかにしたので、ついに、主の激しい憤りが、その民に対して積み重ねられ、もはや、いやされることがないまでになった。

36:17 そこで、主は、彼らのもとにカルデヤ人の王を攻め上らせた。彼は、剣で、彼らのうちの若い男たちを、その聖所の家の中で殺した。若い男も若い女も、年寄りも老衰の者も容赦しなかつた。主は、すべての者を彼の手に渡された。

36:18 彼は、神の宮のすべての大小の器具、主の宮の財宝と、王とそのつかさたちの財宝、これらすべてをバビロンへ持ち去った。

36:19 彼らは神の宮を焼き、エルサレムの城壁を取りこわした。その高殿を全部火で燃やし、その中の宝としていた器具を一つ残らず破壊した。

36:20 彼は、剣をのがれた残りの者たちをバビロンへ捕え移した。こうして、彼らは、ペルシヤ王国が支配権を握るまで、彼とその子たちの奴隷となった。

36:21 これは、エレミヤにより告げられた主のことばが成就して、この地が安息を取り戻すためであった。この荒れ果てた時代を通じて、この地は七十年が満ちるまで安息を得た。

一、王と預言者

神は、いつの時代も、ご自分の言葉を伝えるために預言者を立ててこられました。預言者たちは、民衆に語ると共に直接王に助言を与えたり、叱責を与えたりしてきました。イスラエルの最初の王サウルに対してはサムエルが、二代目の王ダビデには預言者ナタンが神の言葉を伝えました。北王国イスラエルでは、預言者エリヤがアハブ王の時代に預言し、たったひとりでバアルの預言者たちに立ち向かいました（列王記第一 18 章）。エリヤの後継者エリシャはヨラム王の時代にサマリヤがアラムの大軍に包囲されたとき、アラムからの救いを預言するなど、ヨラム王以降の王たちに神の言葉を語りました（列王記第二 7 章）。

ユダの国では、ウジヤ王、ヨタム王、アハズ王、ヒゼキヤ王たちの時代に、預言者イザヤが、宮廷預言者として働き、神の言葉を伝えました。ヒゼキヤ王のときエルサレムがアッシリアに包囲されましたが、イザヤはアッシリア軍の退却を預言し、それは預言のとおりになっています（列王記第二 19 章）。

ユダの国の末期には預言者エレミヤが活躍しました。エレミヤはヨシヤ王の 13 年目に預言活動を始めています。ヨシヤ王はその治世の 18 年目に神殿をきよめ、律法

の書を発見し、過越の祭を行いました。エレミヤはヨシヤ王の宗教改革を助けたと思われます。ヨシヤ王とエレミヤの間に強いつながりがあったことは、ヨシヤ王が亡くなった時、エレミヤがヨシヤのために哀歌を作ったことから分かります（歴代誌第二 35:25）。

このように、神は、預言者を王の助言者とされました。国が平安を保ち、繁栄するためには、政治や経済、軍事だけでなく、神への信仰、信頼がなくてはならないからです。詩篇 20:7 にこうあります。「ある者はいくさ車を誇り、ある者は馬を誇る。しかし、私たちは私たちの神、主の御名を誇ろう。」また詩篇 33:16-17 にはこう言われています。「王は軍勢の多いことによっては救われない。勇者は力の強いことによっては救い出されない。軍馬も勝利の頼みにはならない。その大きな力も救いにならない。」詩篇 147:10-11 には「神は馬の力を喜ばず、歩兵を好まない。主を恐れる者と御恵みを待ち望む者とを主は好まれる」とあり、箴言 21:31 には「馬は戦いの日のために備えられる。しかし救いは主による」とあります。信仰が国を支えと聖書は教えています。

そして、神へ信仰は、神の言葉によって養われ、導かれます。ですから、国が正しく治められるためには、神の言葉を伝える預言者が必要なのです。預言者を重んじ、預言者を通して語られる神の言葉に従う王は、国をよく治め、人々に幸いをもたらしますが、預言者を軽んじ、預言者を通して語られる神の言葉を無視したり、それに逆らったりする王は、国を破滅に導くのです。

二、ゼデキヤとエレミヤ

きょうの箇所には、ユダの最後の王、ゼデキヤのことが書かれています。ゼデキヤは、神が彼に与えてくださった預言者エレミヤの言葉に従いませんでした。エレミヤはゼデキヤにバビロンに対して従順であるようにと語り続けてきましたが、エジプトを頼んでバビロンに逆らいました。バビロン軍がエルサレムを取り囲んだとき、エジプトが軍勢を動かしたので、バビロンは一時的にエルサレムから退却しました。それで、ゼデキヤはエジプトに頼ろうとしました。その時、エレミヤは、主の言葉の通り、こう預言しました。「見よ。あなたがたを助けに出て来たパロの軍勢は、自分たちの国エジプトへ帰り、カルデヤ人が引き返して来て、この町を攻め取り、これを火で焼く。」（エレミヤ37:7-8）ところがゼデキヤは、この言葉を聞いても、なおエジプトに頼り、バビロンに逆らい続けました。エレミヤの預言の通り、バビロン軍は再びやってきて、エルサレムを包囲しました。その時、エジプトは何の助けにもならなかったのです。

エレミヤは、ユダの指導者たちにバビロンに降伏するよう勧めたので、「ユダの兵士たちの士気をくじいた」という理由で捕まえられ、泥の穴に投げ込まれました。ゼデキヤ王は、エレミヤの言葉には従いませんでしたが、エレミヤが主の預言者であることは認めていましたので、エレミヤを助け、密かにエレミヤから預言を聞こうとしました。その時エレミヤはゼデキヤにこう告げま

した。「イスラエルの神、万軍の神、主は、こう仰せられる。『もし、あなたがバビロンの王の首長たちに降伏するなら、あなたのいのちは助かり、この町も火で焼かれず、あなたも、あなたの家族も生きのびる。あなたがバビロンの王の首長たちに降伏しないなら、この町はカルデヤ人の手に渡され、彼らはこれを火で焼き、あなたも彼らの手からのがれることができない。』」（エレミヤ 38:17-18）しかし、ゼデキヤはこの言葉にも聞き従いませんでした。ゼデキヤはエレミヤの預言が何度も成就しているのを見てきました。今、自らとユダの国に迫っている危機を目の当たりにしているのに、主の言葉に逆らっているのです。このような頑固さは、いつの時代の、誰の心の中にもあります。主の言葉に耳を塞ぎ、それに逆らう頑固さこそ、人間の罪の中で最も重いもののひとつであり、私たちの人生を惨めなものにしている最たるものだと思います。

エルサレムの城壁が破られたためゼデキヤは逃げましたが、すぐに捕まえられ、バビロンの王ネブカドネザルのもとに連れて行かれました。エレミヤ 52:10-11 はゼデキヤの最後をこう描いています。「バビロンの王は、ゼデキヤの子らを彼の目の前で虐殺し、ユダのすべての首長たちをリブラで虐殺した。またゼデキヤの両眼をえぐり出し、彼を青銅の足かせにつないだ。バビロンの王は、彼をバビロンへ連れて行き、彼を死ぬ日まで獄屋に入れておいた。」読むのが辛くなるような言葉ですが、これは、ゼデキヤが、神の言葉に逆らい、自ら招いた結

果だったのです。歴代誌第二 36:12に「彼はその神、主の目の前に悪を行ない、主のことばを告げた預言者エレミヤの前にへりくだらなかつた」とあり、歴代誌第二 36:16に「ところが、彼らは神の使者たちを笑いものにし、そのみことばを侮り、その預言者たちをばかにしたので、ついに、主の激しい憤りが、その民に対して積み重ねられ、もはや、いやされることがないまでになった」とある通りです。主が、預言者を通して差し出しておられる救いへの招きを拒み続けるなら、その最後は滅びでしかないのです。

三、キリストと私たち

旧約の時代、主は、預言者を通して、ご自分の民に御言葉を語られました。新約の時代には、キリストを通して、すべての人に御言葉を伝えておられます。そのことは変貌の山での出来事によって目に見える形で表されています。マルコ 9:2-7にこう書かれています。「それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。そして彼らの目の前で御姿が変わった。…また、エリヤが、モーセとともに現われ、彼らはイエスと語り合っていた。」変貌の山にモーセとエリヤが現われていますが、これには意味があります。じつは、ヘブライ語の旧約聖書は「律法」の部と「預言者」の部、そして「詩篇」の部に分かれています。イエスが「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就する」（ルカ 24:44）と言われたのは、この旧約の三分に基づいて

います。「律法と預言者と詩篇」というのが、正式の言い方なのですが、普通は「詩篇」が省略され、「律法と預言者」だけで、旧約聖書全体を指します。聖書は多くの箇所「律法と預言者」はイエス・キリストを預言するものであり、「律法と預言者」はイエス・キリストによって成就されたと言っています。変貌の山でモーセとエリヤが現れたのは、モーセが「律法」を、エリヤが「預言者」を代表し、ふたりがイエスを証しすることによって、イエスが「律法と預言者」によって証しされて世に来られた救い主であることを示すためだったのです。

福音書は、変貌の山の出来事をこう結んでいます。「そのとき雲がわき起こってその人々をおおい、雲の中から、『これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい。』という声がした。」父なる神が「これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい」と言われたのは、御子イエス・キリストこそ律法と預言者が語ってきたすべてのことを成就したお方、律法と預言者が伝えてきたことのすべて、いやそれ以上のことを私たちに教えてくださるお方だからです。

それで、ヘブル人への手紙は「神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました」（ヘブル 1:1-2）と言うのです。この言葉のとおり、神はイエス・キリストを通してすべての人に語り、今も語り続けておられま

す。

しかし、多くの人はいこう言うのです。「神は、古代には人間に語りかけたかもしれないが、現代はもはや語ってはおられない。人間は高度に進化し、自らのうちに知恵を持っている。神に聞く必要はなく、自分の理性の声に聞き従えばいいのだ」と言います。しかし、それは本当ではありません。人間の理性は限られたもので、すべてを知り尽くすことはできませんし、人間には自己中心の思いや罪深い欲望があって、理性を正しく用いることができないのです。この世界に、私たちの人生に、私たち自身の内面に解決できないでいる問題がなんと多くあることでしょうか。人類の根本的な問題は、古代も現代も変わらないのです。神の言葉に聞く以外に、その解決は与えられないのです。

キリストは、今日の世界が抱えている問題から、家族や個人の問題にいたるまで、その問題の大小にかかわらず、それらを解決する真理を語り、教え続けておられます。キリストが語っておられることに耳を塞ぐ愚かな者にならないで、真剣にキリストに聞き従っていく、私たちでありたいと思います。

キリストが私たちに語っておられる言葉は「福音」と呼ばれます。“Good News”という意味です。キリストがくださる救いの福音は、罪と死から解放され、永遠のいのちを受け、神の子どもされ、天の御国を受け継ぐという、もう、これ以上はないという「グッド・ニュース」です。ヘブル2:1-3は、こう言っています。「ですから、

私たちは聞いたことを、ますますしっかり心に留めて、押し流されないようにしなければなりません。もし、御使いたちを通して語られたみことばでさえ、堅く立てられて動くことがなく、すべての違反と不従順が当然の処罰を受けたとすれば、私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにしたばあい、どうしてのがれることができましょう。」ゼデキヤが犯したとの同じ過ちを繰り返さないようにしましょう。最高のお方によって語られている最高のメッセージを、喜びと感謝をもって受け入れ、御言葉に聞き従いましょう。

(祈り)

私たちに語りかけてくださる神さま。あなたは黙っておられるお方ではありません。あなたはアダムに「あなたは、どこにいるのか」と呼びかけ、あなたから離れていった人々に「わたしに返れ」と叫び続けてこられました。そして今は、イエス・キリストによって、あなたのお心のすべてをさらけ出して、私たちに語っておられます。「キリストに聞け」と言われたあなたの言葉に、聞き従う私たちとしてください。主イエスのお名前です。

福音と日本文化 ④ 一あとがきにかえて

1853年、ペリーが率いる「黒船」が浦賀に現れ、翌年「日米和親条約」が結ばれ、200年以上続いた日本の鎖国政策が終わりました。それと共にプロテスタントの宣教師が来日し、日本での伝道が再開されました。数多くの宣教師が来日しましたが、ヘボン宣教師について記しておきたいと思います。

ジェームス・ヘボン宣教師は1859年、明治維新の以前に来日し、医師であったので、日本の伝道を医療活動から始めました。18年にわたり、数万人の治療にあたりました。また、日本で最初の本格的な和英辞書を作り、そのときに用いたアルファベットによる日本語表記が「ヘボン式ローマ字」となり、今日、広く使われています。ヘボン宣教師は日本語の能力を生かし、聖書の日本語訳に大きな貢献をしました。夫人が始めた「ヘボン塾」は後に来日したバラ宣教師に委ねられ、やがて明治学院となりました。

ヘボン塾に学び、後に外務大臣にもなった林董（はやしただす）は、ヘボン博士について、次のように言っています。「その生涯は信念に基づく行為に、絶えず迷うことなく専心没頭することを彼に要求し続けた。博士は私の国に福音を宣べ伝えるために生涯の最良の時代を惜しみなく費やされた。博士が与えられた義務を全うするために献身された様は、世界の多くの公人の業績がその行為の故に人類の賞賛を集めたような華々しさではなかったにせよ、その生涯は高潔で、尊ばれるべきであった点では、彼らに優るとも劣りはしない。」

アメリカが日本に「黒船」だけではなく、このような福音の宣教者を送ってくれたことに感謝しています。



Penguin Club

www.penguinclub.net